

## ●津波の想定

明治29年の明治三陸地震と、昭和8年の昭和三陸地震による大津波で、壊滅的な被害を受けた旧田老村（現在は宮古市）は、昭和33年に最初の防潮堤をつくり、昭和54年に総延長2.5kmに及ぶ高さ10mの防潮堤「万里の長城」を完成させました。

ところで、平成20年4月に公表された宮古市田老地区の津波ハザードマップは、明治三陸地震津波も想定しており、このマップによると津波の被害範囲は「万里の長城」を越え、市街地の奥深くまで及んでいます。つまり今回の大津波は想定内にありました。

しかしそうだとすると、個々人にとっては目前に高さ10mの構造物が横たわると、これがいつしか想定限界になっていくのかも知れません。構造物に頼りすぎるのは危険です。へんに落とし所のあるようなハザードマップは見直しを行い、構造物を超えた分の人命について、地域が真剣に一体となって考える必要があると思われまます。

一方、明治と昭和の大津波を教訓に、高台に集団移転した釜石市の唐丹本郷地区と大船渡市の吉浜地区は、今回の大津波から難を逃れました。しかしながら高台はやはり不便であり、いつしか新しく建てられる住宅は低地で形成し、また、漁に不便であることから元の海沿いに戻ってしまった方がおられます。

高台に住み続けた人も低地に新しく住みまた戻った人も多くは、記憶のなかに想定があったと思われまます。しかし希にしか起こらないことについては、過去の防災まちづくりの経験がいつまでもつか、難しい面があると思われまます。

高尾利文（第二計画部）

## ●震災から得るものは何か

東北地方太平洋沖地震では想定を超える規模の災害が押し寄せて、既存のインフラを破壊していった。とはいうものの、実際には災害規模の想定に疑問を投げかけている専門家もいた。通常防災対策と言えば起こり得る災害の規模を想定し、それに対処できるだけの機能を持たせた設計を行うが、その想定した災害の規模が小さければ、想定を超える災害に対しては機能を失う。今回はそれをまざまざと見せつけられた訳である。

構造物を造る以上、大きさや資金に制限があるのは致し方ないが、科学的データの軽視、あるいは都合の良い解釈、防災投資資金を抑えるための想定規模で設計をし、予算枠ありきの型通りの防災対策しかやってこなかったツケが、何万人もの人命を奪う形で回ってきたのではないのか。

この責任はまず国、行政、防災専門家等を含めて、想定災害規模に対する固定観念、防災対策の進め方や予算消化型行政に問題があったと言わざるを得ない。さらに防災施設整備を含めインフラ整備への税金投入を監視し、何でもかんでも予算削減・規模縮小を叫ぶ民衆の圧力もまた原因ではないのか。

我々は、コンサルタントとしても一民間人としても、自分たちの命や財産を守るために本当に必要な投資はなんなのか、必要なものを見極めて取捨選択する機知と覚悟を持たなければならない。今回の災害から得られる科学的事実の分析、統合を行い、将来を予見する深い洞察力と想像力を働かせ、それぞれが考え直すべき時がきている。

酒井夕子（海外室）

発行責任者：代表取締役 庄山 高司  
事務局：株式会社アルメック 業務部  
東京都目黒区青葉台 1-19-14  
電話 03-5489-3211・FAX 03-5489-3210  
Eメール [hotnews@almec.co.jp](mailto:hotnews@almec.co.jp)  
ホームページ <http://www.almec.co.jp/>